

10年後の将来像 - 日中比較の中間報告 -

清泉女学院大学 向田久美子
清泉女学院大学 東 洋

How people describe their future life? : A Japan-China Comparison

Seisen Jogakuin College MUKAIDA, Kumiko
Seisen Jogakuin College AZUMA, Hiroshi

本研究では、日本人と中国人による将来展望に関する自由作文の比較検討を行った。その結果、中国人は将来を具体的、前向きに記述する傾向があるのに対し、日本人は全体的にあいまいに記述する傾向があった。世代差や性差についても検討したところ、仕事に関する記述では、中国では世代差が大きく見られたのに対し、日本では性差が大きく見られた。また、家族・友人に関する記述では、両国とも男性よりも女性のほうが多く言及していた。先行研究との比較の結果、中国における記述はアメリカに近い傾向をもつことが示唆された。今後は、こうした違いをもたらし基になっている、それぞれの文化圏におけるスクリプトの分布状況について、より精緻な知見を得ていくことが課題になると思われる。

【キー・ワード】 将来展望，日中比較，スクリプト

This study explored the similarities and differences of future time perspective between Japanese and Chinese. Participants were asked to imagine and describe one day 10 years in the future. As a result, we found that Chinese tended to describe their future life more concretely and positively. On the other hand, the Japanese description tended to be vague. We also examined the effect of sex and generation. As for description of working situation, generation difference accounted for a remarkable variation in China, and sex difference a notable one in Japan. Women tended to refer to family and friends more than men in both countries. In order to account for the differences found in this study, future research needs to examine the kind and distribution of scripts in each culture.

【Key Words】 Future time perspective, Japan-China comparison, Script

問 題

東（1999；2004）によれば、さまざまな場面で、人の行為が状況にどのようにはたらき、どのよう

な経過をたどり、どのような結末に至るかについての“常識的な期待”は、それぞれの文化の中に蓄えられているスクリプトのレパトリーに強く規定される。そしてこの期待は、それぞれの文化圏の人がどのように行為すべきだと考えるか、実際にどう行為するか、どういう行為を逸脱的だと考えるかを規定する。したがって、意見や判断や行為における文化間の差異は、各文化圏におけるスクリプトの分布の差異とそれに基づく常識的な期待の差異によって説明できる部分が多いと考えられる。

真島・東(1998)は、大学生の自由作文課題から、アメリカ人の将来展望が明確かつ具体的で、時間的射程も比較的長い傾向があるのに対し、日本人の将来展望は漠然としており、将来の一時点をさらなる先に向けての通過点ととらえる傾向があることを見出している。こうした差異は、両国における文化的スクリプトとそれに基づく常識的な期待の差異を反映していると考えられる。アメリカのスクリプトでは、目標達成や結果を重視する傾向があり、そのことが、人は将来の目標を明確に定め、それに向けて邁進すべきだといった期待を生んでいるのではないかと思われる。一方、日本では行為のプロセスとその時の気持ちを重視する傾向があり、そのことが、人は明確な目標を定めるといっても、その時々状況にうまく自分を適合させながら生きるものだといった期待を生んでいると思われる。

さて、こうしたあいまいな、プロセス志向の将来展望は、日本ばかりでなく、東アジア全般に共通して見られる傾向なのだろうか。Markus & Kitayama (1991) や Nisbett (2003) に見られるように、欧米と対比させつつ、東アジアの人々の認知や行為のあり方に共通性が見られることを指摘した研究は多い。しかし、対照的な2つの国、あるいは2つの文化圏を比較した場合、ともすると両者の差異がクローズアップされやすく、両者の共通性や同一文化圏内における差異は捨象されがちである。この点を克服し、より精緻な形で文化的スクリプトの分布状況を把握するためには、多文化間比較や、文化内変動と文化間変動の比較などが有効な手法となりうる(東, 2003)。

そこで、本研究では、同じ東アジアに属する中国と日本を取り上げ、将来展望における記述に両国間でどのような差異と共通性が見られるのかを探索的に検討することにした。また、それぞれの文化圏における変動を見るために、世代差や性差についても検討を試みた。具体的には、日米比較を行った先行研究(真島ら, 1998)を参考にして、調査協力者に「10年後のある一日」について自由に記述してもらうという方法をとった。

方 法

1. 調査協力者

日本における調査協力者は345名(大学生243名, 大人102名), 中国では167名(大学生83名, 大人84名)であった。性別ごとに見た内訳と平均年齢を表1に示す。日本の大学生は、東京大学, 東京女子大学, 信州大学, 専修大学他の学生であり, 中国の大学生は、北京師範大学, 北京工商大学の学生であった。

表1 調査協力者の数と平均年齢

		男性	女性	合計	平均年齢
日本	大学生	104	139	243	19.42 (SD = 1.35)
	大人	28	74	102	50.41 (SD = 4.61)
中国	大学生	41	42	83	20.88 (SD = 1.68)
	大人	40	44	84	48.39 (SD = 4.44)

2. 調査時期

日本では2004年10月～12月、中国では2004年4～5月に調査を実施した。

3. 手続き

日本では、大学の授業時間を通じて調査用紙を配布し、翌週の授業時に直接回収、もしくは留置きにより回収した。大学生の保護者で協力してもらえる人がいる場合には、大学生を通じて同じ質問紙を配布し、郵送法等により随時回収した。中国では、各大学で協力者を募るとともに、大学生の保護者で協力してもらえる人がいる場合には、郵送により質問紙を配布し、回収した。

4. 調査内容

以下の教示を印刷したA4用紙を配布し、自由作文により回答してもらった。「まず今から10年後のあなたを考えてみて下さい。それまでにいろいろなことがだいたいうまくいったとしましょう。そういう10年後の10月のある日(平日)の生活について述べて下さい。どんなことをして、どんなことを考え、どんなことを感じているか、なるべく詳しく具体的に書いて下さい。」中国では、同じ教示を中国語に翻訳したものをを用いた。

分析方法

まず、内容分析をするためのコード表を作成した。日本と中国での予備調査(2003年10月実施)に基づき、作文の中に見出される表現を網羅するカテゴリーをリストアップした。それぞれのカテゴリーの意味内容、どのような場合にチェックするかについては、日本と中国において2度にわたる議論を行い、調整をはかった。最終的に、表2に見られる10の大カテゴリーと35の小カテゴリーを用いることとし、作文の中に該当する記述があればチェックをしていくという方法をとった。具体的な記述例は表3に示す通りである。なお、一人の回答において、1つの小カテゴリーに当てはまる記述が2つ以上あった場合でも、数の多寡は問題にせず、記述の有無だけをチェックしていった。

中国では、心理学を専攻している大学院生4名がコーディングにあたり、日本では同じく心理学を専攻している大学生4名がコーディングにあたった。これらの研究協力者は、実際のコーディングに入る前に、研究者によるトレーニングを受け、協力者間でコーディング結果が一致するまで試行を繰り返した。その後は、回答を分担してそれぞれが単独でコーディングを行い、迷うケースが出てきた場合にのみ、協力者同士で相談し、解決をはかるという方法をとった。

表2 10年後の将来 コーディング・カテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
1. 情景描写	a. 場所・風景・天気など
2. 日常生活	a. 自分一人でする日常的な行動(散歩、趣味、旅行など) ^{*1} b. 忙しい、ハード・スケジュール ^{*2} c. のんびり、ぼーっと d. 平凡 e. 充実している
3. 海外経験	a. 海外での生活・経験(留学、仕事、家族の訪問など) ^{*3}
4. 仕事関係	a. 仕事をしている(ボランティア、研究活動も含む) b. 引退している、定年 c. 具体的な職業・地位・仕事内容 d. 今の仕事を続けるかどうかという悩み e. 仕事上の悩み・ストレス(上記dは除く) f. 仕事上の達成・成功 g. 仕事に対するやりがい・責任感 h. 仕事上の具体的な行動(ミーティング、調査など)
5. 家族・恋人関係	a. 結婚している / 恋人がいる b. 結婚していない / 恋人なし c. 結婚 / 恋人をもつことに対する焦り、願望 d. 子ども・孫がいる e. 子ども・孫への思い(期待、心配など) f. 親への思い(感謝、心配など) g. 夫・妻 / 恋人とのよい関係(パートナーへの愛情) h. 家庭と仕事の両立 i. 家族・恋人のために、あるいは家族・恋人とともに自分の具体的な行動(家事、子どもの世話、デートなど) j. 家族・恋人が行う具体的な行動(料理、仕事など)
6. 友人	a. 友達との付き合い(食事、おしゃべりなど)
7. 気持ち	a. 幸せ、幸福 b. 肯定的感情(上記aは除く。楽しい、誇らしい、満足など) c. 否定的感情(空しい、寂しい、欲求不満、不安など)
8. 行動スタイル	a. 前向き、意欲的(一生懸命、努力、頑張っているなど) b. 消極的
9. 将来ビジョン	a. ポジティブな将来自己像 b. 自分の将来に対する不安 c. 将来の計画(~するつもり、予定)
10. 老い	a. 老いへの言及

*1 他の人と一緒にする行動の場合、5-もしくは6-a)にチェックする。

*2 現在もしくは最近の状況についてのみチェックする。過去のことは含めない。

*3 短期間の旅行は含めない。主に過去と現在の状況についてチェックするが、具体的な計画(留学など)が記されている場合は将来の場合でもチェックする。

表3 各カテゴリーの記述例

カテゴリー	記述例
1-a. 場所・風景・天気など	さわやかな秋の季節となり・・・/よく晴れた一日・・・/上海の小さなマンションに住み・・・
2-a. 自分一人の行動	公園でランニングをしてから、朝食を・・・/習い事に出かけ・・・/お風呂に入って寝る・・・
2-b. 忙しい	仕事が忙しく・・・/手帳はスケジュールでいっぱい・・・/多忙な毎日・・・
2-c. のんびり、ぼ～と	のんびりと生活し・・・/ぼ～と過ごす・・・/老後はゆっくりと・・・
2-d. 平凡	平凡な毎日・・・/平凡ではあるが・・・
2-e. 充実している	充実している・・・
3-a. 海外生活・経験	外国に住んでいる・・・/アフリカで・・・/アメリカの大学院で修士号をとり・・・
4-a. 仕事をしている	会社に出かけ・・・/働いている・・・/まだ仕事を続けている・・・
4-b. 引退・定年	退職している・・・/定年を迎え・・・/3年前にリタイヤし・・・
4-c. 具体的な職業	パイロットとして・・・/動植物の資源保護の仕事・・・/銀行に勤め、管理職について・・・
4-d. 今の仕事を続けるか	今の仕事は自分の能力を発揮できない・・・/このまま続けるかどうか迷いがある・・・
4-e. 仕事上の悩み(d以外)	仕事がうまくいかなかったり・・・/重役が気に入らない・・・/顧客の考えと合わず・・・
4-f. 仕事上の達成・成功	金融界で大きな名声を残し・・・/製造業で天下をとろうとしている・・・/昇進を狙う・・・
4-g. 仕事のやりがい・責任感	仕事にやりがいを感じて・・・/重要な仕事を任せられ・・・/責任を感じている・・・
4-h. 仕事上の具体的な行動	取引先と連絡をとり・・・/教壇に立って授業をし・・・/無菌実験室でPCRの実験を・・・
5-a. 結婚 / 恋人あり	結婚して・・・/夫と・・・/恋人がいて・・・/婚約の決まっている人と・・・
5-b. 結婚 / 恋人なし	まだ結婚はしておらず・・・/独身・・・/恋人はいない・・・
5-c. 結婚 / 恋人願望	結婚するかどうか考えている・・・/そろそろ結婚したい・・・
5-d. 子ども・孫がいる	子どもが31歳になり・・・/ふたりの娘も独立し・・・/孫が学校から帰ってくるのを待ち・・・
5-e. 子ども・孫への思い	子どもの成長を思いながら・・・/子どもの教育方針・・・/娘が仕事に集中できるよう・・・
5-f. 親への思い	両親の海外旅行のために貯金・・・/父母が健康であれば・・・/高齢の両親を養う・・・
5-g. パートナーとのよい関係	優しい夫がいて・・・/家庭円満・・・/ずっと連れ添っていくことができたら・・・
5-h. 家庭と仕事の両立	仕事も続けたいが、子どもとの時間を作りたいと悩んでいる・・・/仕事と家庭の両立・・・
5-i. 家族がらみの行動	家族と一緒に食事をとり・・・/子どものお弁当を作り・・・/妻と旅行に出かけ・・・
5-j. 家族・恋人自身の行動	家内は友人と温泉に行き・・・/夫は食器を洗い・・・
6-a. 友達との付き合い	友人と食事をし・・・/電話で友人とおしゃべり・・・
7-a. 幸せ、幸福	幸せを感じ・・・/幸せいっぱい・・・/今の幸せな生活・・・/自分の人生は幸せだ・・・
7-b. 肯定的感情(a以外)	自分に自信・・・/毎日を楽しみ過ごし・・・/とても満足して・・・/穏やかな気持ち・・・
7-c. 否定的感情	気持ちがふさいで・・・/憂鬱・・・/寂しく・・・/孤独・・・/虚無感・・・
8-a. 前向き、意欲的	一生懸命努力し・・・/努力すれば成果が得られる・・・/頑張っている・・・
8-b. 消極的	特に何もせず・・・/機械的に過ごす・・・
9-a. ポジティブな将来自己像	大きな希望を抱いて・・・/楽観的に立ち向かうだろう・・・
9-b. 将来に対する不安	将来に対する不安も・・・/漠然とした不安感を抱いて・・・
9-c. 将来の計画	姉妹で同じ家に住もうと・・・/家族旅行の計画を立て・・・/いずれ仕事に復帰し・・・
10-a. 若い	年をとったと実感・・・/自分はもう年をとり・・・

結 果

1. 日中全体比較

まず、表4の「全体」のデータに沿って、日本人と中国人それぞれの結果と、国による差の有無について報告する。

1) 情景描写について

「1-a. 場所・風景・天気など」については、日本人(22.6%)よりも中国人(45.5%)のほうが言及する割合が高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 28.06, p < .01$)。

2) 日常生活について

5つの小カテゴリーのうち、「2-a. 自分一人の行動」への言及が最も多くなっていたが、その割合は中国人(27.5%)よりも日本人(45.5%)のほうが高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 15.17, p < .01$)。続いて、「2-b. 忙しい」「2-e. 充実している」がそれぞれ1割前後見られたが、国による差は認められなかった。出現率は1割に満たなかったものの、「2-d. 平凡」については、日本人(8.4%)のほうが中国人(2.4%)よりも言及する割合が高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 6.74, p < .01$)。

3) 海外経験について

「3-a. 海外生活・経験」については、日中とも約3%の出現率しかなく、国による差も見られなかった。

4) 仕事関係について

8つの小カテゴリーのうち、最も出現率が高かったのが「4-a. 仕事をしている」で、日中とも7割近くに上った。「4-c. 具体的な職業」も日中で有意差は見られず、ともに3割強の出現率であった。一方、大きな差が見られたのは、「4-h. 仕事上の具体的な行動」であり、中国人で46.1%であったのに対し、日本人では10.7%しか見られなかった($\chi^2(1, N=512) = 81.40, p < .01$)。その他、出現率は低いながら有意差の見られたカテゴリーとして、「4-b. 引退・定年」、「4-f. 仕事上の達成・成功」があり、いずれも中国人(順に、15.6%; 8.4%)のほうが日本人(順に、5.5%; 3.8%)よりも高くなっていた(順に、 $\chi^2(1, N=512) = 14.21, p < .01$); $\chi^2(1, N=512) = 4.80, p < .05$)。

5) 家族・恋人関係について

10個の小カテゴリーのうち、比較的出現率が高かったのは、「5-a. 結婚/恋人あり」と「5-d. 子ども・孫がいる」、「5-i. 家族がらみの行動」であった。「5-a. 結婚/恋人あり」では、日本人(54.5%)のほうが中国人(34.1%)よりも言及する割合が高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 18.70, p < .01$)。全体の1割にも満たないものの、「5-b. 結婚/恋人なし」、「5-c. 結婚/恋人願望」への言及も、日本人(順に、8.1%; 6.1%)のほうが中国人(順に、0.6%; 1.2%)よりも多くなっていた(順に、 $\chi^2(1, N=512) = 11.90, p < .01$; $\chi^2(1, N=512) = 6.30, p < .05$)。

「5-d. 子ども・孫がいる」については日中とも4割強の出現率、「5-e. 子ども・孫への思い」については2割弱の出現率となっており、国による差は見られなかった。「5-h. 家庭と仕事の両立」は中国ではほとんど言及されなかったのに対し(0.6%)、日本では9.5%の出現率となっていた($\chi^2(1, N=512) = 14.59, p < .01$)。

「5-i. 家族がらみの行動」と「5-j. 家族・恋人自身の行動」については、いずれも日本人（順に、27.2%；10.7%）よりも中国人（順に、44.3%；18.6%）において出現率が高くなっていった（順に、 $\chi^2(1, N=512) = 14.87, p < .01$ ； $\chi^2(1, N=512) = 6.00, p < .05$ ）。

表4 各カテゴリーの出現率(%)

カテゴリー	中国					日本				
	全体	学生	大人	男	女	全体	学生	大人	男	女
1-a. 場所・風景・天気など	45.5	49.4	41.7	34.6	55.8	22.6	24.3	18.6	25.0	21.2
2-a. 自分一人の行動	27.5	22.9	32.1	22.2	32.6	45.5	45.7	45.1	43.9	46.5
2-b. 忙しい	16.2	27.7	4.8	13.6	18.6	13.9	17.3	5.9	10.6	16.0
2-c. のんびり、ぼ～っと	6.0	4.8	7.1	3.7	8.1	6.4	3.7	12.7	3.0	8.5
2-d. 平凡	2.4	2.4	2.4	1.2	3.5	8.4	9.9	4.9	6.1	9.9
2-e. 充実している	11.4	18.1	4.8	8.6	14.0	9.3	11.5	3.9	12.1	7.5
3-a. 海外生活・経験	3.6	6.0	1.2	2.5	4.7	3.2	4.5	0.0	6.1	1.4
4-a. 仕事をしている	68.3	97.6	39.3	77.8	59.3	65.2	76.1	39.2	84.8	53.1
4-b. 引退・定年	15.6	0.0	31.0	7.4	23.3	5.5	2.1	13.7	6.8	4.7
4-c. 具体的な職業	34.7	59.0	10.7	34.6	34.9	30.1	37.0	13.7	47.7	19.2
4-d. 今の仕事を続けるか	1.8	3.6	0.0	0.0	3.5	2.3	3.3	0.0	3.0	1.9
4-e. 仕事上の悩み(d以外)	12.6	24.1	1.2	8.6	16.3	7.8	11.1	0.0	15.2	3.3
4-f. 仕事上の達成・成功	8.4	12.0	4.8	13.6	3.5	3.8	4.9	1.0	7.6	1.4
4-g. 仕事のやりがい・責	4.2	7.2	1.2	7.4	1.2	7.2	9.9	1.0	8.3	6.6
4-h. 仕事上の具体的な	46.1	72.3	20.2	53.1	39.5	10.7	13.6	3.9	18.2	6.1
5-a. 結婚／恋人あり	34.1	36.1	32.1	33.3	34.9	54.5	54.3	54.9	36.4	65.7
5-b. 結婚／恋人なし	0.6	1.2	0.0	0.0	1.2	8.1	11.5	0.0	14.4	4.2
5-c. 結婚／恋人願望	1.2	1.2	1.2	0.0	2.3	6.1	8.6	0.0	9.1	4.2
5-d. 子ども・孫がいる	42.5	25.3	59.5	38.3	46.5	46.1	40.7	58.8	25.0	59.2
5-e. 子ども・孫への思い	19.2	7.2	31.0	12.3	25.6	12.8	7.8	24.5	6.1	16.9
5-f. 親への思い	8.4	13.3	3.6	2.5	14.0	5.2	4.5	6.9	4.5	5.6
5-g. パートナーとのよい	7.8	12.0	3.6	6.2	9.3	12.5	10.3	17.6	7.6	15.5
5-h. 家庭と仕事の両立	0.6	1.2	0.0	0.0	1.2	9.6	13.2	1.0	1.5	14.6
5-i. 家族がらみの行動	44.3	33.7	54.8	35.8	52.3	27.2	29.2	22.5	7.6	39.4
5-j. 家族・恋人自身の行	18.6	10.8	26.2	13.6	23.3	10.7	8.6	15.7	6.1	13.6
6-a. 友達との付き合い	13.2	9.6	16.7	7.4	18.6	12.8	11.1	16.7	6.8	16.4
7-a. 幸せ、幸福	20.4	19.3	21.4	12.3	27.9	18.0	21.0	10.8	9.8	23.0
7-b. 肯定的感情(a以外)	61.7	65.1	58.8	53.1	69.8	29.3	30.5	26.5	25.8	31.5
7-c. 否定的感情	19.2	26.5	11.9	17.3	20.9	12.8	13.6	10.8	15.2	11.3
8-a. 前向き、意欲的	32.3	43.4	21.4	32.1	32.6	13.6	15.6	8.8	15.2	12.7
8-b. 消極的	1.8	3.6	0.0	2.5	1.2	2.6	3.7	0.0	3.8	1.9
9-a. ポジティブな将来自	14.4	15.7	13.1	19.8	9.3	9.3	9.1	9.8	9.8	8.9
9-b. 将来に対する不安	3.0	6.0	0.0	3.7	2.3	9.6	9.5	9.8	10.6	8.9
9-c. 将来の計画	21.0	28.9	13.1	17.3	24.4	33.0	32.5	34.3	26.5	37.1
10-a. 老い	5.4	1.2	9.5	6.2	4.7	2.0	0.8	4.9	2.3	1.9

6) 友人関係について

「6-a. 友達との付き合い」については、日中とも1割強の出現率となっており、国による差は認められなかった。

7) 気持ちについて

「7-a. 幸せ、幸福」については、日中とも2割前後の出現率で差は見られなかったが、「7-b. (幸せ以外の)肯定的感情」については、中国では61.7%の出現率であったのに対し、日本では29.3%となっていた($\chi^2(1, N=512) = 49.29, p < .01$)。「7-c. 否定的感情」は1~2割の出現率であったが、国による有意な差は認められなかった。

8) 行動スタイルについて

「8-a. 前向き、意欲的」については、中国(32.3%)のほうが日本(13.6%)よりも高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 24.88, p < .01$)。

9) 将来ビジョンについて

「9-a. ポジティブな将来自己像」については日中とも1割前後の言及が見られたが、国による有意な差は認められなかった。「9-c. 将来の計画」については、中国(21.0%)よりも日本(33.3%)のほうが高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 11.90, p < .01$)。出現率は1割にも満たなかったものの、「9-b. 将来への不安」も中国(3.0%)より日本(9.6%)のほうが高くなっていた($\chi^2(1, N=512) = 7.07, p < .01$)。

10) 老いについて

「10-a. 老い」への言及はごくわずかしが見られなかったが、中国(5.4%)のほうが日本(2.0%)より若干多いという結果になった($\chi^2(1, N=512) = 4.19, p < .05$)。

2. 日中世代別比較

次に、表4の「学生」「大人」のデータに沿って、日本人と中国人を世代別に比較検討した結果について報告する。ここでは、国×世代のクロス集計と χ^2 検定を行った結果のうち、世代差が認められたカテゴリーを中心に報告する。

2) 日常生活について

日中とも「2-b. 忙しい」と「2-e. 充実している」は学生のほうが言及する割合が高いのに対し(順に、 $\chi^2(3, N=512) = 25.51, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 13.43, p < .01$)、「2-c. のんびり、ぼっと」は大人のほうが言及する割合が高くなっていた($\chi^2(3, N=512) = 10.44, p < .05$)。特に、「2-b. 忙しい」については、中国で世代による開きが大きく見られた。

4) 仕事関係について

「4-a. 仕事をしている」、「4-c. 具体的な職業」、「4-e. 仕事上の悩み」、「4-f. 仕事上の達成・成功」、「4-g. 仕事上のやりがい・責任感」、「4-h. 仕事上の具体的な行動」については、国による出現率の大小はあるものの、いずれも大学生のほうが大人よりも出現率が高くなっていた(順に、 $\chi^2(3, N=512) = 107.67, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 64.21, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 39.21, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 11.49, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 14.09, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 150.62, p < .01$)。とりわけ、「4-a. 仕事をしている」は中国の学生で97.6%、日本の学生で76.1%と、大半

の学生が言及していた。上記6つの小カテゴリーのうち、「4-g. 仕事上のやりがい・責任感」を除き、世代差は日本より中国のほうが大きくなっていった。「4-h. 仕事上の具体的な行動」については、中国の学生(72.3%)が圧倒的に多く、さらに、日本の大学生(13.6%)よりも中国の大人(20.2%)のほうが高いという結果になった。「4-b. 引退・定年」については、日中ともほぼ大人のみが言及していたが($\chi^2(3, N=512) = 76.30, p < .01$)、世代差は中国のほうが大きくなっていった。

5) 家族・恋人関係について

出現率は高くないものの、「5-b. 結婚/恋人なし」、「5-c. 結婚/恋人願望」への言及は、ほぼ日本の大学生のみに見られることがわかった(順に、 $\chi^2(3, N=512) = 29.87, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 18.78, p < .01$)。

「5-d. 子ども・孫がいる」、「5-e. 子ども・孫への思い」については、日中とも大人のほうが言及が多くなっていったが($\chi^2(3, N=512) = 29.84, p < .01$; $\chi^2(3, N=512) = 38.08, p < .01$)、世代差は中国においてより大きく見られた。「5-f. 親への思い」については、中国でのみ世代差が見られ、学生のほうが大人よりも高くなっていった($\chi^2(3, N=512) = 9.28, p < .05$)。

「5-h. 家庭と仕事の両立」に言及していたのは、ほぼ日本の大学生のみ(13.2%)であった($\chi^2(3, N=512) = 31.91, p < .01$)。「5-i. 家族がらみの行動」については、中国で大きな世代差が見られ、学生よりも、大人のほうが多くなっていった($\chi^2(3, N=512) = 24.69, p < .01$)。「5-j. 家族・恋人自身の行動」については、日中とも大人のほうが出現率が高くなっていったが($\chi^2(3, N=512) = 17.64, p < .01$)、世代による開きは中国のほうが大きくなっていった。

7) 気持ちについて

「7-c. 否定的感情」について、中国でのみ世代差が見られ、大学生のほうが大人よりも高くなっていった($\chi^2(3, N=512) = 11.14, p < .05$)。

8) 行動スタイルについて

「8-a. 前向き、意欲的」については、日中とも大学生のほうが高くなっていったが、世代差は中国においてより大きく見られた($\chi^2(3, N=512) = 39.69, p < .01$)。日本の大学生(15.6%)は中国の大人(21.4%)よりも低くなっていった。

9) 将来ビジョンについて

「9-c. 将来の計画」については、日本では世代差が見られなかったのに対し、中国では学生のほうが大人よりも高くなっていった($\chi^2(3, N=512) = 13.14, p < .01$)。

10) 老いについて

「10-a. 老い」への言及は、日中とも大人のほうが多くなっていった($\chi^2(3, N=512) = 17.69, p < .01$)。

3. 日中男女別比較

最後に、表4の「男」「女」のデータに沿って、日本人と中国人を性別ごとに比較検討した結果について報告する。ここでは、国×性別のクロス集計と χ^2 検定を行った結果のうち、性差が認められたカテゴリーを中心に報告する。

1) 情景描写について

「1-a. 場所・風景・天気など」については、日本では性差が見られなかったのに対し、中国では性差が見られ、男性より女性のほうが出現率が高くなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 37.59, p < .01$)。

2) 日常生活について

「2-a. 自分一人の行動」については、日本では性差が見られなかったのに対し、中国では男性より女性のほうが多く増えていた ($\chi^2(3, N=512) = 17.26, p < .01$)。

4) 仕事関係について

「4-a. 仕事をしている」については、日中とも男性のほうが多く言及していたが、性差は日本のほうが大きくなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 43.66, p < .01$)。「4-b. 引退・定年」については、中国で性差が見られ、男性より女性において多く見られた ($\chi^2(3, N=512) = 27.74, p < .01$)。「4-c. 具体的な職業」については、中国では性差が見られなかったのに対し、日本では女性より男性のほうが高くなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 31.65, p < .01$)。「4-e. 仕事上の悩み」については、中国では女性のほうが男性よりも、日本では男性のほうが女性よりも高くなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 19.35, p < .01$)。

「4-f. 仕事上の達成・成功」については、日中とも男性のほうが高くなっていったが ($\chi^2(3, N=512) = 19.51, p < .01$)、中国のほうが性別による差が大きくなっていった。「4-h. 仕事上の具体的な行動」については、日中とも女性より男性のほうが高くなっていったが、中国での出現率が非常に高いため、日本の男性 (18.2%) と中国の女性 (39.5%) を比べると、前者のほうが低いという結果になった ($\chi^2(3, N=512) = 92.69, p < .01$)。

5) 家族・恋人関係について

「5-a. 結婚/恋人あり」については、中国では性差が見られなかったのに対し、日本では男性よりも女性のほうが多く言及していた ($\chi^2(3, N=512) = 46.90, p < .01$)。「5-b. 結婚/恋人なし」への言及は、中国ではほとんど見られなかったのに対し、日本では男性のほうが女性よりも高くなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 27.78, p < .01$)。

「5-d. 子ども・孫がいる」については、日中とも女性のほうが多く言及していたが、性差は日本のほうが大きくなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 40.15, p < .01$)。「5-e. 子ども・孫への思い」についても、日中とも男性より女性のほうが多く増えていった ($\chi^2(3, N=512) = 17.01, p < .01$)。「5-f. 親への思い」については、日本では性差が見られなかったのに対し、中国では男性よりも女性のほうが多く言及していた ($\chi^2(3, N=512) = 11.48, p < .01$)。

「5-h. 家庭と仕事の両立」に言及していたのは、ほぼ日本の女性のみであった ($\chi^2(3, N=512) = 37.03, p < .01$)。「5-i. 家族がらみの行動」については、日中とも女性のほうが言及する割合が高くなっていったが、性差は日本のほうで大きく見られた ($\chi^2(3, N=512) = 57.56, p < .01$)。「5-j. 家族・恋人自身の行動」についても、女性のほうが多く言及していた ($\chi^2(3, N=512) = 13.43, p < .01$)。

6) 友人関係について

「6-a. 友達との付き合い」については、日中とも女性のほうが言及する割合が高くなっていった ($\chi^2(3, N=512) = 11.34, p < .05$)。

7) 気持ちについて

「7-a. 幸せ, 幸福」については, 日中とも女性のほうが多く言及していた ($\chi^2(3, N=512) = 16.31, p < .01$)。 「7-b. その他の肯定的感情」については, 日本ではあまり性差は見られなかったが, 中国では男性より女性のほうが多く言及していた ($\chi^2(1, N=512) = 55.24, p < .01$)。

9) 将来ビジョンについて

「9-c. 将来の計画」について, 日中とも女性のほうが言及する割合が高くなってしたが ($\chi^2(3, N=512) = 13.41, p < .01$), 性差は日本のほうが大きくなっていった。

4. 大カテゴリーごとに見た特徴

これまで述べてきた結果について, 大カテゴリーごとに整理し直し, 記述例を示す。なお, 中国人の記述例については, 回答の一部を日本語に翻訳したものから採用した。

1) 情景描写について

情景描写については, 中国で多く見られ, 約半数の人が記述していた。この傾向は, とりわけ女性において強く見られた。

情景描写の記述例: 中国・女性 (43 歳)

さわやかな秋の季節になり, 窓の外は熟れたりんごやとうもろこしの農園が広がり, 目の前には元気はつらつとした大学生や大学院生の姿があります。

2) 日常生活について

散歩や趣味, 生活に伴う細々した行為など, 自分一人で日常的にする行動については, 中国人よりも日本人のほうが多く言及しており, 約半数の人が記述していた。日本では性差は見られなかったが, 中国では女性のほうが多く記述する傾向が見られた。

日常的な行動の記述例 1: 日本・女性 (56 歳)

自分の趣味を続けている。もうじき演奏会が近づいているため, ギターの練習をするが, 指が動かず苦労している。

日常的な行動の記述例 2: 日本・男性 (19 歳)

9 時ごろ入浴し, 風呂を出たら好きな音楽を聴いて, 少しだけ酒を飲む。そして 12 時になったら就寝する。

世代別比較の結果, 大学生のほうが日々の生活の忙しさや充実ぶりを記述する傾向があるのに対し, 大人のほうはのんびりとした生活について記述する傾向が見られた。

3) 海外経験について

日本でも中国でも出現率が低く, 世代や性別による違いは認められなかった。

4) 仕事関係について

仕事関係の記述は, 全般にわたって, 大人よりも大学生のほうが多くなっていった。「仕事をしている」という記述は, 中国の大学生でほぼ 100%, 日本でも 8 割近くに上った。一方, 日本では強い性差も見られ, 働いていることに言及する女性の割合は, 男性よりも 3 割ほど少なくなっていた。また,

具体的な職業への言及についても、中国では性差が見られないのに対し、日本では女性のほうが3割ほど少なくなっていた。反対に、引退についての言及は、大人に多く見られ、中国では男性より女性のほうが多くなっていた。世代差の大きさという点に着目すると、全般的に日本よりも中国のほうが大きくなっていた。

さらに、国による大きな違いが見られたのが、仕事上の行動に関する記述である。中国では仕事上の自分の行動を非常に具体的に記述する傾向があるのに対し、日本では漠然と「 系の会社に勤めている」といった記述をする傾向が見られた。

仕事関係の記述例 1：中国・女性（21 歳）

私は株式の仲買人になって、取引所に向かっている。・・・今日の取引先との交渉について考える。最近の株の傾向をクライアントに話し、これからの動向を分析し、アドバイスする。

仕事関係の記述例 2：日本・男性（19 歳）

コンピュータ会社の社員として、会社勤め。会社での位置づけは中の上くらい。仕事自体には満足しているが、単調な毎日に飽きを感じている。

5) 家族・恋人関係について

結婚している、していない、しようかと思っている、といった結婚にまつわる記述は、日本において非常に多く、半数以上で見られた。この傾向はとりわけ女性において強く、作文の冒頭で述べられることが多かった。また、家庭と仕事の両立といった記述は、ほぼ日本の若い女性においてのみ見られることがわかった。

結婚に関する記述例：日本・女性（20 歳）

私は 10 年後、結婚しています。夫婦共働きです。30 歳で夫は 32 歳。3 歳になる息子がいます。

子や孫に関する記述も比較的多く見られたが、日本でも中国でも、男性より女性のほうが、学生よりも大人のほうが言及する割合が高くなっていた。また、家族がらみの行動についての記述は、日本よりも中国のほうが比較的多く、4 割を超えていた。世代や性による違いを見ると、中国では、男性よりも女性のほうが、学生よりも大人のほうが家族がらみの行動を記述する傾向が強かった。日本では世代差は見られなかったものの、性差は見られ、女性の 4 割近くが記述していたのに対し、男性では 1 割にも満たなかった。

家族に関する記述例：中国・男性（50 歳）

10 年後、私はすでに退職してのんびりと生活しています。孫の面倒を見たり、パソコンゲームをやったりします。夜、妻と一緒に犬の散歩に出かけます。その時、息子はきっといい仕事に就いているはずです。もう心配することはありません。

6) 友人関係について

日中とも 1 割強と少ない言及であったが、比較すると、男性よりも女性のほうが多くなっていた。

7) 気持ちについて

幸福感への言及は、日中とも2割前後で差は見られなかったが、いずれの国においても女性のほうが多く言及する傾向にあった。その他の肯定的感情に関しては、中国での言及のほうが多く、6割を超えていたのに対し、日本での言及は3割程度であった。なお、中国では性差が見られ、女性のほうが多く言及していた。否定的な感情については、中国の大学生において比較的多く、3割近くの人が言及していた。

気持ちに関する記述例：中国・女性（48歳）

子どもが仕事で成功し、幸せな家庭を築き、また私たち夫婦とも元気で毎日を過ごしていることに、とても満足しています。

8) 行動スタイルについて

「頑張っている」「努力している」などの前向きな行動スタイルへの言及は、中国で多く、3割を超えていた。とくに大学生にその傾向が強く、4割以上が言及していた。日本でも大人より大学生のほうが言及する傾向が見られたが、全体的に少なく、1割前後の出現率にとどまった。

行動スタイルに関する記述例：中国・女性（21歳）

満足のいく仕事を見つけるのは簡単ではありません。今の仕事を大切にして、さらに力を注ぎたいと思っています。同時に自分の知識を増やし、能力を高めたいです。努力した10年間を振り返り、ほっと安堵します。

9) 将来ビジョンについて

将来に何らかの計画を立てていることへの言及は、日本のほうが高く、3割を超えていた。日本では世代差はあまり見られなかったが、性差が見られ、女性のほうが多く言及していた。中国では全体では2割程度の出現率であったが、世代差が見られ、学生のほうが多くなっていた。将来に対する不安は、日中とも1割にも満たなかったが、比較すると日本のほうが多くなっていた。

将来ビジョンに関する記述例：日本・女性（19歳）

今は育児が忙しいので仕事はしていないが、ある程度手を離れたら、仕事復帰したいと考えている。

10) 老いについて

日中ともごくわずらかし言及していなかったが、世代別に見ると、大人のほうが大学生よりも多く言及していた。

考 察

以上の結果を踏まえ、日本と中国で描かれた将来像にどのような共通性があり、またどのような差異があるのかについて考察する。将来像の中身として、仕事に関する記述と家族に関する記述の比重が大きかったことから、この2つを中心に見ていくことにする。

1. 仕事に関する記述

まず、仕事関係の記述については、日中とも世代による違いがあることがわかった。これから社会に出ようとする大学生において仕事関係の記述が多く、これから引退を迎えようとする大人世代に記述が少ないこと、また、日々の忙しさや充実ぶりを記述する傾向が大学生において強いことは、ある意味で当然のことと言えよう。

こうした世代差は日本よりも中国において明瞭に見られたが、これは女性が社会に出て働くことが普通に見られることと関係があるのかもしれない。男性であれ、女性であれ、大人は働くものであり、老いたら引退するものだという暗黙の期待とそれに伴う実践があり、そのことが、このようなはつきりとした世代差を生み出しているのではないかと思われる。引退に言及する女性が中国において多かったことも、そのことと関係しているだろう。

一方、日本における世代差は中国ほど大きいものではなく、むしろ性差のほうが大きいことが示された。男性に比べると、女性は仕事の有無や具体的な職業に触れる割合が低くなっていた。中国とは対照的に、日本の女性は“仕事か家庭か”、あるいは“仕事も家庭も”といずれかの選択を迫られることが多く、その背後には、「子どもが小さいうちは母親が面倒を見るものだ」という期待が、揺らいでいるにせよ、存在しており、それに伴う社会的実践があるからではないかと思われる。全体の1割強だったとはいえ、「仕事と家庭の両立」に言及したのが日本の若い女性だけであったことも、そのことを裏付けていると言えよう。

日中における興味深い差異は、仕事上の行動をどのように記述するかという点であった。例に挙げたように、中国では非常に具体的に、生き生きと仕事上の行動を記述する傾向があるのに対し、日本では、職種については書かれていても、一日の具体的な行動となると詳しく記述しない傾向にあった。対照的に、日常生活に関することは、日本人のほうがより具体的に書く傾向にあった。

このことは、プロセス重視の傾向(真島ら, 1998)や役割社会(東, 1994)の影響、Markusら(1991)の相互依存的自己観が、中国よりも日本において強いことを示唆しているのかもしれない。将来の目標を定め、それに向かって鋭意努力するというよりは、将来の生活は自らの意思のみによって決まると考えず、その時々状況や相手によって左右されるものだという期待があり、そのことが、他者との関係抜きには語れない仕事上の行動について、予測を立てたり、具体的に記述したりすることを難しくしているのかもしれない。一方、自らの日常生活に関することは、他者によって左右される部分が少なく、現在の延長線上にあるものとして比較的予測しやすかったために、具体的記述が多かったのかもしれない。

あるいはまた、仕事については、ある程度の情報(職種・地位など)を提示するだけで、詳しく述べなくとも、相手の了解が得られるという、経験に基づく期待があるからかもしれない。いずれにせよ、これらの点については推測に過ぎず、今後検討を重ね、明らかにしていく必要があるだろう。

2. 家族に関する記述

次に、家族に関する記述について述べる。結婚に関する記述は、中国では3割強で世代差も性差も見られなかったのに対し、日本では全体で5割を超えており、さらに女性において言及する割合が高くなっていた。日本では、結婚ということが、自らの生活の中でもつ比重、あるいは自己を語る上でつ意味がより大きく、重いかもしれない。女性に多く見られた点については、先に述べた仕事関

係の記述と相補的な関係にあると言えるだろう。

子や孫への言及は、日中とも比較的良好な傾向が見られた。ともに4割強の言及であり、世代差、性差が見られ、学生よりは大人、男性よりは女性において多く見られた。また、友人との付き合いについても、日中とも女性のほうが多く記述していた。これらのことは、男性に比べ、女性のほうが関係志向的であるというギリガン（Gilligan, 1982）の主張を裏付ける結果と言えるだろう。子や孫への言及を細かく見ると、中国では性差よりも世代差のほうが大きく、記述を読んでも、子どもへの思いや期待が強く感じられる内容が多く見受けられた。

仕事上の行動に関する記述ほどではないが、家族に関する行動についても、中国のほうが具体的な記述が多くなっていた。日中ともに性差が見られ、女性のほうが多く記述する傾向があったが、その傾向は日本において著しかった。先に述べたように、日本人にとっては、相手によって左右される部分の大きい状況については、予測を立てることが難しいのかもしれない。しかし、著しい性差が見られた点からすると、仕事に忙しく、家庭を顧みない暇のない父親、家庭であれこれと子どもの世話を焼く母親という現状に即した期待を、自らの将来に抱いているとも言える。この点についても、今後の検討が必要だろう。

3. その他の記述

その他の記述について特徴的な傾向を見てみると、中国では前向きな姿勢や肯定的感情に、より多く言及する傾向が見られた。それほど大きな差ではないものの、将来に対する不安や計画という点では、日本のほうが多く言及していた。これには、両国の社会経済的背景も関連していると思われるが、文化的スクリプトの差異による語り方の違いを反映しているのかもしれない。

4. アメリカとの比較から

最後に、先行研究との比較を通して、本研究で得られた知見をより大きな枠組みの中に位置づけてみたい。真島ら（1998）の行った日米比較研究は、大学生のみを対象としており、記述する内容も7年後と20年後の2種類に分かれていた。また、コーディング・カテゴリーの内容も必ずしも本研究とは一致しない。しかしながら、ほぼ同じ手法を用いて研究がなされていること、興味深い知見により、本研究の結果を相対的にとらえることができることから、いくつかの点で比較を試みることにする。

まず、仕事に関する記述であるが、真島ら（1998）における「明確な職種」への言及は、アメリカでは7年後で65.0%、20年後で71.7%であったのに対し、日本では7年後で35.7%、20年後で44.6%であった。10年後の「具体的な職業」に言及した本研究の大学生は、中国で59.0%、日本で37.0%となっていた。日本人大学生については、職種に言及する傾向がいずれも3~4割であり、一貫した傾向が見られたと言える。中国は職種に言及する割合が高く、どちらかというアメリカに近い傾向があるようだ。

「仕事生活の具体的な行動記述」に関しては、アメリカでは7年後で66.7%、20年後で65.0%であったのに対し、日本では7年後で8.9%、20年後で28.6%であった。本研究の大学生における「仕事上の具体的な行動」への言及は、中国で72.3%、日本で13.6%となっていた。日本では仕事に関する具体的な記述が乏しいのに対し、中国ではアメリカと同等、あるいはそれ以上に具体的に書く傾向が強いと言えるだろう。

「日常生活の肯定感情」の記述については、アメリカでは7年後で31.7%、20年後で65.0%であったのに対し、日本では7年後で8.9%、20年後で30.4%であった。本研究の大学生の「(幸せ以外の)肯定的感情」への言及は、中国で65.1%、日本で30.5%となっていた。それぞれの言語における語彙の多寡も影響しているかもしれないが、数値だけを見る限り、中国はアメリカに近く、肯定的感情への言及が多いのに対し、日本では少ないと言えるだろう。

以上、いくつかの点について比較を試みたが、日本人の描く(特に仕事上の)将来像は、アメリカ人や中国人に比べて、具体性に欠け、肯定的な感情への言及が少ないという特徴をもっているようだ。さらに言えば、このような知見は、同じ東アジアであっても、日本人と中国人の将来展望の記述には、大きな隔たりがあること示唆するものである。今後は、こうした違いをもたらす基になっている、それぞれの文化圏におけるスクリプトの分布状況について、より精緻な知見を得ていくことが課題になると思われる。

参考文献

- 東洋(1994)日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 東洋(1999)文化心理学の方法をめぐって - 媒介概念としての文化的スクリプト - 発達研究, 14, 113-120 .
- 東洋(2003)日米比較研究ノート - 文化心理学と異文化間比較 - 発達研究, 17, 107-113 .
- 東洋(2004)文化と発達心理学 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, s3 .
- Gilligan, C. (1982) *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* . Harvard University Press . (『もうひとつの声 - 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』岩尾寿美子(訳)川島書店, 1993年)
- Nisbett, R. E. (2003) *The geography of thought* . NY: The Free Press . (『木を見る西洋人 森を見る東洋人』村本由紀子(訳)ダイヤモンド社, 2004年)
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation . *Psychological Review*, 98, 224-253 .
- 真島真里・東洋(1998)作文課題による目標構造と将来展望に関する研究 発達研究, 13, 106-118.

<謝 辞>

コーディング・カテゴリーの作成、結果の解釈にあたり、ご助言をいただいた前文京女子大学の真島真里先生、清泉女学院大学の上原泉先生、高崎文子先生に心よりお礼申し上げます。また、中国における調査実施とコーディング・カテゴリーの作成にご協力いただいた、フォン・アイピン氏、北京師範大学の Zhang Houcan 先生、Xiaomin Sun 氏をはじめとする大学院生の皆様にも深く感謝申し上げます。

< 付 記 >

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)「行為の理解，推測，評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト：日・米・中比較研究」(課題番号：14310062；研究代表者：東 洋)の助成，および(財)発達科学研究教育センターの研究委託を受けて実施された。

